

金沢大学社会教育研究室のあゆみ

(その十二)

昭和四十七年度（第十五次）

金沢大学教育学部社会教育研究室のあゆみ

（その十二）

自昭和四十七年四月一日
至昭和四十八年三月三十一日

(一) 昭和四十七年度金沢大学社会教育研究室活動要項

- ・社会教育の原理研究部門
 - ・社会教育の実践的方策研究部門
 - ・調査研究部門
 - ・刊行事業
 - ・図書資料の充実
- (二) 社会教育研究室事務局ならびに研究員
- (三) 研究室運営委員会委員

(一) 昭和四十七年度金沢大学社会教育研究室

活動要項

- 一 社会教育の原理研究部門
- 研究主題
- 。社会教育の理念

(四) 昭和四十七年度社会教育研究室活動日録

- (五) 入室式
- (六) 学内開放講座
- ・問題別研究部会
 - ・共同研究会
- (七) 学外開放講座
- (八) 刊行
- (九) 図書資料の蒐集

討議題目

- 。大学と社会教育
- 。公民館問題
- 。社会教育の理念
- 。社会教育研究の課題
- 。公民館の今日的課題

。地域組織化活動

。大学開放講座のあり方

・対象の組織化

・学習の系統化

・学習内容の研究

・学習方法の研究

実施方法

研究員或は部外講師を招き、主題追求の研究会を定期的に開く。月二回（年間約二〇回）

二 社会教育の実践の方策研究部門

原理研究部門の研究主題“大学と社会教育”の実践的研究として大学開放講座を開く。

研究主題

対象の組織化

学習の系統化

実施方法

。研究生募集

学歴・年令・性別をとわず学習意欲のある人々に学習の場と機会を提供する。

。学習開放講座

全学的規模の長期開放講座

農村問題研究部会（年間約一〇回）

日本の教育研究部会（年間約一〇回）

青少年問題研究部会（ “ ” ）

成人教育研究部会（ “ ” ）

公民館問題研究部会（ “ ” ）

社会心理学研究部会（ “ ” ）

社会思想研究部会（ “ ” ）

仏教思想研究部会（ “ ” ）

相談心理学研究部会（ “ ” ）

人間と自然研究部会（ “ ” ）

自主研究部会（ “ ” ）

共同研究会（年間約 五回）

各研究会の学習の進め方は担当教官と研究生との話し合いによりそれぞれ年間計画をたて種々多様な学習形態をとる、研究主題を究明する。実施に際し研究部会の重複をさける。

研究協議会（年 一回）

。学外開放講座

・文部大臣委嘱の大学開放講座一講座を当研究室が担当する。

・県下の各地教委の希望により当研究室と共催で三

〜五講義を約二〇カ所において開く。

三 調査研究部門

急激に都市化しつつある地域の社会教育の実態調査を
三カ年計画で実施、本年度はその第一年次とする。

四 刊行事業

年報 社会教育研究第一三号

季報 第三七、三八、三九、四〇号を六、九、一二、

三月に発行

五 図書資料の充実

研究室充実のため不可欠の要件であるので四十七年度
もその充実をはかる。特に全国の各大学、県教委より資
料を蒐集する。

(二) 社会教育研究室事務局ならびに研究員

昭和四十七年度の室員は左の通りであった。

室員(事務局員)

室長	大 平 勝 馬	教育学部長
主事	出雲路 暢 良	教育学部助教授
幹事	新 谷 賢太郎	教育学部教授
	戸 頃 重 基	法文学部教授
	古 野 有 隣	教育学部助教授
書記	福 島 徳太郎	教育学部事務長
	西 村 四郎市	専 任

社会教育研究室研究員(十一名) (五十音順)

(三) 金沢大学社会教育研究室運営委員会委員

出雲路 暢 良	教育学部助教授	倫理学
岩 男 耕 三	教育学部助教授	社会学
木 村 久 吉	薬学部助教授	生薬学
新 谷 賢太郎	教育学部教授	哲 学
多 田 治 夫	教養部助教授	心理学
戸 頃 重 基	法文学部教授	倫理学
二 宮 哲 雄	法文学部教授	社会学
橋 本 芳 契	法文学部教授	宗教学
古 野 有 隣	教育学部助教授	社会教育学
矢ヶ崎 孝 雄	教育学部教授	地理学
※永守良治氏の定年退官、沢田忠治氏の医療技術短期大 学への転出のあと、社会教育学専攻の古野有隣氏が新た に教育学部に着任、当研究室研究員に就任された。		
大 平 勝 馬	教育学部長	
戸 頃 重 基	法文学部教授	
新 谷 賢太郎	教育学部教授	
出雲路 暢 良	教育学部助教授	
古 野 有 隣	教育学部助教授	
益 子 帰来也	理学部教授	
石 崎 有 信	医学部教授	

木村久吉 薬学部助教授
 柳原麻夫 工学部教授
 相内俊雄 教養部教授
 宮孝一 図書館長
 磯村正 事務局長
 幹事
 松井我何人 経理部長
 福島徳太郎 教育学部事務長
 大橋秀二 図書館事務長

(四) 昭和四十七年度社会教育研究室研究活動

日録

四月	八日(土)	① 仏教思想研究部会	十四日(日)	② 社会心理学研究部会
	十二日(水)	① 研究員会	二十日(土)	① 相談心理学部会
	十五日(土)	① 社会心理学研究部会	二十一日(日)	① 自然と人間研究部会
	十八日(火)	① 農村問題研究会—方針検討会	二十二日(月)	② 研究員会
	二十二日(土)	入室希望者の面接	二十三日(火)	① 調査委員会
五月	一日(月)	② 農村問題研究会—小委員会	二十七日(土)	③ 農村問題研究会—第一回研究会
	六日(土)	① 運営委員会	四日(日)	② 社会思想研究部会
		② 仏教思想研究部会	五日(月)	② 日本教育研究部会
		① 社会思想研究部会	六日(火)	④ 農村問題研究会—第一回研究会
		入室式	十日(土)	整理会
			十一日(日)	① 自主ゼミ—東西比較哲学
			十二日(月)	② 自然と人間研究部会
			十七日(土)	② 相談心理学部会
			十八日(日)	② 調査委員会
			二十一日(水)	③ 社会心理学研究部会
			二十二日(木)	③ 仏教思想研究部会
			二十四日(土)	③ 研究員会
			二十七日(火)	① 研究員研究部会
				① 共同研究部会
				⑤ 農村問題研究会—第二回研究会
				③ 社会思想研究部会
七月	一日(土)			

二日(日)	③自然と人間研究部会	同	①鶴来町会場
四日(火)	③調査委員会	同	④仏教思想研究部会
八日(土)	②共同研究会	同	夏季講座③宇の気町会場
九日(日)	④社会心理学研究部会	同	②鶴来町会場
十一日(火)	④研究員会	同	①富来町会場
	②研究員研究会	同	②同
十六日(日)	夏季講座①②能登島町会場	同	※③鶴来町会場
	②自主ゼミ	同	③鳥屋町会場
十七日(月)	④調査委員会	同	①美川町会場
	夏季講座①加賀市会場	同	④宇の気町会場
十八日(火)	②同	同	※⑤同
十九日(水)	③同	同	①山中町会場
二十日(木)	※④同	同	②松任市会場
二十二日(土)	③日本の教育研究部会	同	②同
二十三日(日)	③相談心理学部会	同	②山中町会場
二十四日(月)	夏季講座①珠洲市会場	同	②美川町会場
二十五日(火)	②同	同	※③松任市会場
	①鳥屋町会場	同	③山中町会場
二十七日(木)	②同	同	①②門前町会場
	①宇の気町会場	同	※③同
二十八日(金)	※③珠洲市会場	同	※③美川町会場
		同	④山中町会場

五日(土)	同	※⑤同	二十一日(月)	同	①穴水町会場
同	※③富来町会場	二十二日(火)	同	②同	
③自主ゼミ		二十四日(木)	同	①中島町会場	
夏季講座①津幡町会場		二十六日(土)	同	※③羽咋市会場	
②同		二十七日(日)	同	②③中島町会場	
③同		二十八日(月)	同	③穴水町会場	
④鳥屋町会場		二十九日(火)	同	※④同	
⑥農村問題研究会―第三回研究会		三十一日(木)	同	※④中島町会場	
夏季講座※③能登島町会場		九月 三日(日)	④日本の教育研究部会		
①高松町会場		六日(水)	⑤自主ゼミ		
①七尾市会場		九日(土)	④相談心理学部会		
①羽咋市会場		十六日(土)	⑤社会心理学研究部会		
※⑤鳥屋町会場		十七日(日)	⑤仏教思想研究部会		
②高松町会場		十八日(月)	①文部省委嘱大学開放講座		
②七尾市会場		二十日(水)	⑥自主ゼミ		
※③高松町会場		二十一日(木)	②大学開放講座		
※③七尾市会場		二十二日(金)	④社会思想研究部会		
①鹿島町会場		二十五日(木)	④同		
②同		三十日(土)	③共同研究会		
②羽咋市会場		十月 二日(月)	⑤大学開放講座		
④自主ゼミ		四日(水)	⑦自主ゼミ		
夏季講座※③鹿島町会場		九日(月)	⑥大学開放講座		
二十日(日)					
十日(木)					
十一日(金)					
十二日(土)					
十四日(月)					
十五日(火)					
十七日(木)					
十八日(金)					
十九日(土)					

十一日(水)

⑧自主ゼミ

十二日(木)

⑦大学開放講座

十四日(土)

共同研究会

十六日(土)

⑥社会心理学研究部会

⑧大学開放講座

十九日(火)

⑨同

二十一日(土)

⑤日本の教育研究部会

二十二日(日)

⑤相談心理学部会

二十三日(月)

※⑩大学開放講座

二十八日(土)

⑤社会思想研究部会

⑥仏教思想研究部会

十一月

四日(土)

⑦社会心理学研究部会

⑤自然と人間研究部会

⑦農村問題研究会―第四回研究会

八日(水)

※⑨自主ゼミ

十一日(土)

※⑤共同研究会

十三日(月)

⑤調査委員会

十五日(水)

※③研究員研究会

十八日(土)

⑥社会思想研究部会

⑥相談心理学部会

二十五日(土)

⑦仏教思想研究部会

⑥日本の教育研究部会

十二月

一日(金)

⑧農村問題研究会―第五回研究会

二日(土)

※⑦日本の教育研究部会

⑧仏教思想研究会

八日(金)

⑥調査委員会

九日(土)

⑦相談心理学部会

二十五日(月)

⑦調査委員会

昭和四十八年

一月

十日(水)

⑧同

十三日(土)

⑧相談心理学部会

十四日(日)

⑨調査委員会

二十日(土)

⑥自然と人間研究部会

二十六日(金)

⑨農村問題研究会―第六回研究会

二十七日(土)

⑨社会心理学研究部会

⑨仏教思想研究部会

二月

三日(土)

※⑩同

五日(月)

⑤研究員会

十日(土)

⑩調査委員会

※⑦自然と人間研究部会

十二日(月)

⑥研究員会

十七日(土)

⑦社会思想研究部会

※⑨相談心理学部会

十七〜二十五日 調査

二十六日 回収

二十二日(木) ※⑦ 研究会

二十四日(土) ※⑩ 社会心理学研究部会

※⑧ 社会思想研究部会

※⑩ 農村問題研究会—合宿研修会

二十五日(日) ※⑪ 同

三月三十一日(土) ※⑪ 社会心理学研究部会

註 ※の数字は最終回を示す。

運営委員会

研究会

研究員研究会

学内開放講座

社会心理学研究部会

社会思想研究部会

仏教思想研究部会

日本の教育研究部会

相談心理学部会

自然と人間研究部会

農村問題研究会

自主ゼミ

共同研究会

一回

七回

三回

十一回

八回

十回

七回

九回

七回

十一回

九回

五回

学外開放講座(夏季講座)

十九会場 七十三講義

聴講者 三、四一三人(文部省委嘱開放講座の聴講

者数は除く)

(五) 入室式

当研究室は昭和三十三年発足以来、性別、年令、学歴を問わず、学習意欲のある市民のかたがたに呼びかけ、応募者を研究生として迎え、年間さまざまな学習形態の場を提供してきた。

本年度(第十五年度)の入室式を次の式次第で、五月十三日(土)に開催した。

場所 教育学部第二中講義室

時間 十四時—十七時

入室式次第

室長のあいさつ

協力会代表あいさつ

研究室の概要説明

研究員の自己紹介と部会説明

記念講演 「親鸞の教育思想」

研究員 出雲路 暢 良

記念講座講演要旨は「季報」三十七号所載。

(六) 学内開放講座

。問題別研究部会
。共同研究部会

(1) 問題別研究部会

昭和四十七年度入室の研究生のための学習の場として、前記の研究活動日録にあるように学内開放講座は当研究室の講義室において年間七十七回開講した。一回三時間のゼミナール形式の学習を行った。従って学習時の総計は、二一時間に及ぶ。

市民一般に学習の場を提供し、当研究室の研究員である本学教官を中心にして、毎回ゼミナールを進め、各問題別に分れて学習し、その学習を系統的に深化しつつ実績を連年に積み重ねること十五年間に達した。

各問題別研究部会の指導教官と使用テキストは左記の通りである。その進度は、本年度発行の「季報」三十七、八、九、四十号にそれぞれ報告されている。

。農村問題研究部会

担当教官 出雲路 暢 良

古 野 有 隣

本年度の基本方針を検討し「石川県の農業・農民・農村

の現状と問題点を将来について検討する」こととし、新しい意欲的メンバーの参加をうるよう働きかけることとした。なおこの方針に添ってより具体化することを四名の小委員に委託した。

①昭和四十七年度の学習目標

石川県の農業・農民・農村はいまどういふ問題をかかえているのか。農村問題にかかわっている種々の立場に立つてその背景を分析することを通して（現状の理解）、今後何をのぼし、何を変えていかなければならないのかを、研究会のメンバーが、それぞれなりに考える学習の場とした。

②具体的な進め方

上記の目標に即して、具体的には、農村問題に直接かわりをもっている次のような方から「あなたの仕事にとって、いま、何が問題か」という形で問題提起をうけ、その後の進め方はそれが終了した時点で整理検討する。

- ・ 農業従事者
- ・ 農業関係者
- ・ 農業改良普及員
- ・ 生活改良普及員
- ・ 営業指導員
- ・ 公民館主事

。日本の教育研究部会

指導教官 岩 男 耕 三

テキスト 山住正己「教科書」岩波新書

これまで学んできた今日の日本の教科書の問題をふまえて、教師のあり方について討議する。しかし、最も根本は、教師がほんとうに一人々々の子どもの心にふれ、それを見ぬき、そして、それをふまえた教育を、その教師自身がつくりだしていくことであろう。そうしてはじめて、教育は真に中味のあるものになり、教師はまさに教育にうちこむことになるだろう。

画一的な教科書をあてがわれて、たんなる、「仕事」として教育が行なわれている今日の現状をよほど真剣に見なおさねばならないことを深く語りあった。
。社会心理学研究部会

テキスト 南 博「社会心理学入門」
指導教官 沢田忠治

牛島義友「西欧と日本の人間形成」(第三回以降)

講義内容

「西欧と日本の児童の態度」について

西欧(英、西独、仏)三国の児童と日本の児童とに同一質問紙を使用してその考え方を調査した資料を基礎にして講義し、種々の問題について自由討論した。

。社会思想研究部会

指導教官 戸頃重基

テーマ①日本の公害問題

②『近代社会と日蓮主義』(戸頃重基著)のうち、「幕末維新期における宗教と国家の関係」について

③明治中期後期の社会思想史
。仏教思想研究部会

指導教官 橋本芳契

テキスト 平川 彰「現代人のための仏教」

何分に研究生諸氏の仏教についての会得がかなりに上下のひらきをもったものであるだけに、学習上のピントをあわせるのに苦心している実情である。

。相談心理学研究部会

指導教官 多田治夫

カウンセリング研修

ある記録より…「人の話をきく」ことのむづかしさを語りあっている時に少し酒気を帯びた研究生が入室してきて、彼の話をしきこうとする人、「酒をのんでいるから」聞こうとしない人など、各人さまざまの反応を体験した。そのあとで再び、「話を聞くこと」「人を理解すること」について、今経験したばかりのことをたがいに吟味しあった。

。人間と自然研究部会

指導教官 木村久吉

今年から私に与えられた「人間と自然」という部会で、

私は研究生の方々と、これをどう進めてゆくかに、はじめはつきりした方向性を考え得ることができなかった。

月に一回の会合では実験を通じて云々は無理であろう。しかし、出来れば近い野山や金沢城内の植物や鳥の名ぐらい覚えていただけるよう案内したいと考えていた。第一回（五月二十一日）は医王山の新緑を観察したが、雨であった。

但し、新緑にけぶった緑の山は美しく、見上山荘での語りあいには意義があった。

今年度の話の進めようは次のように行っているわけである。

- 1 地球の歴史とヒトによる質的变化
- 2 地史学概説―進化におけるヒトの位置
- 3 生命の歴史
- 4 生命の起源
- 5 植物の発展
- 6 動物の進化
- 7 植物と動物の生活圏における相関
- 8 生物とヒトの生活圏における相関
- 9 植物の郡落とその変化
- 10 ヒトによる自然の改変

11 人類の将来

参考書…佐藤馨根「生命の歴史」（NHKブックス）

半谷、安部「社会地球化学」

オバーリン「生命の起源」（岩波新書店）

野田春彦「生命の起源」

ケオンアン「生命の起源」

。自主研究部会

東西比較哲学

指案者 松尾宝作

社会教育学の原理は人間学ではならないことは当然であって、而も我が国の憲法や基本法が既にこの域に差し加かっているとき、その事実とイデオロギーとの差を短縮するのは日本民主国民の自主的使命である。自主ゼミナーはこのような問題を互に研究し合う研究会である。そうして、その基調を東洋と西洋の比較哲学におくものである。これは自主的精神を養うための最短距離の学問だからである。

(2) 共同研究会

本年度の共同研究会の年間テーマを「現代日本人の生き方を考える」とし、計五回開催した。

年間テーマ 現代日本人の生き方を考える

（第一回）六月二十四日（土）

テーマ 消費生活

提案 研究生 辻 文夫

井 関 利

越 井 和 子

研究員 矢ヶ崎 孝 雄

司 会 沢 田 忠 治

△第二回▽ 七月八日(土)

テーマ 労働と余暇

提案 松 井 清

竹 田 外志子

佐々木 勝 康

研究員 古 野 有 隣

司 会 多 田 治 夫

△第三回▽ 九月三十日(土)

テーマ 自然と開発

提案 竹 内 域

研究員 野 尻 英 寛

司 会 木 村 久 吉

出雲路 暢 良

△第四回▽ 十月十四日(土)

テーマ 国家と自由

提案 湯 浅 信 伍

研究員 前 川 清 一

戸 頃 重 基

司 会 橋 本 芳 契

△第五回▽ 十一月十一日(土)

テーマ 民主主義のあり方

提案 研 究 生 直 川 久 之 助

金 原 初 男

研 究 員 岩 男 耕 三

司 会 新 谷 賢 太 郎

第一、二回の記録は「季報」三十九号に、第三、四、五回の記録は四十号にそれぞれ報告した。

(七) 学外開放講座

(1) 夏期開放講座

昭和四十七年七月十二日より八月三十一日の間に石川県下各市町教委との共催により、十八会場で講義を開講。聴講者数は三、四一三名であった。その内訳は次の通りである。

・山中町会場

講座名 現代の生き方を考える

月 日 講 義 題 日 講 師

八・一 退屈と不安

金沢大学助教授 出雲路 暢 良

八・二 暮らしの中の情報

〃 〃 古野 有隣

八・三 北陸新幹線と石川県の将来

〃 教授 矢ヶ崎 孝雄

八・四 レジャー時代の国土利用

〃 〃 〃

八・五 日本民族はどこから来たか

〃 〃 二宮 哲雄

・加賀市会場

講座名 変貌する社会を生きぬくために

月 日 講義 題目 講師

七・一七 人類はいつまで地球に住めるか

金沢大学助教授 木村 久吉

七・一八 どうすれば生きていくことが楽しくなるか

〃 教授 戸 頃 重基

七・一九 北陸新幹線と石川県の将来

〃 〃 矢ヶ崎 孝雄

七・二〇 レジャー時代の背景と生き方

〃 助教授 古野 有隣

・美川町会場

講座名 暮らしについて考える

月 日 講義 題目 講師

七・三一 これからの農村はどう変えていったらよいか

八・二 退屈と不安 金沢大学教授 二宮 哲雄

〃 助教授 出雲路 暢良

八・四 レジャー時代の背景と生き方

〃 〃 古野 有隣

・鶴来町会場

講座名 暮らしについて考える

月 日 講義 題目 講師

七・二八 近代西洋医学と中国医学の比較

金沢大学助教授 木村 久吉

七・二九 人類繁栄のための自然の意義とその保護

〃 教授 矢ヶ崎 孝雄

七・三〇 暮らしの中の情報

〃 助教授 古野 有隣

・松任市会場

講座名 家庭教育講座

月 日 講義 題目 講師

八・一 家庭教育の問題点

金沢大学教授 大平 勝馬

八・二 親の願い子の道

〃 〃 橋本 芳契

八・三 家庭教育と親の役割

〃 〃 沢田 忠治

・津幡町会場

講座名 地域問題講座

月 日 講 義 題 目 講 師

八・七 北陸新幹線と石川県の将来

金沢大学教授 矢ヶ崎 孝雄

八・八 都市化と農村問題

〃 〃 二宮 哲雄

八・九 消費者は王様か

〃 〃 助教授 古野 有隣

・宇ノ気町会場

講座名 地域社会の将来に対処するために

月 日 講 義 題 目 講 師

七・二七 北陸新幹線と石川県の将来

金沢大学教授 矢ヶ崎 孝雄

七・二八 地域連帯感を育てるために

〃 〃 助教授 古野 有隣

七・二九 レジャー時代の背景と生き方

〃 〃 〃

七・三二 どうすれば生きていることが楽しくなるか

〃 〃 教授 戸 頃 重基

八・一 都市化と農村問題

〃 〃 二宮 哲雄

・高松町会場

講座名 現在と未来に生きる人間生活について

月 日 講 義 題 目 講 師

八・一一 人類はいつまで地球に住めるか

金沢大学助教授 木村 久吉

八・一四 どうすれば生きていることが楽しくなるか

〃 〃 教授 戸 頃 重基

八・一七 消費者は王様か

〃 〃 助教授 古野 有隣

・羽咋市会場

講座名 教育問題講座

月 日 講 義 題 目 講 師

七・一二 親の願い子の道

金沢大学助教授 真行寺 功

七・一九 家庭教育の問題点

〃 〃 教授 新谷 賢太郎

七・二六 現代と性

〃 〃 助教授 多田 治夫

・富来町会場
講座名 国際政治の理解

月 日 講 義 題 目 講 師

七・二九 アメリカはなぜベトナムに勝てないか

金沢大学教授 戸 頃 重基

七・三〇 東南アジアに旅して(都市と農村)

〃 〃 二宮 哲雄

八・五 人類繁栄のための自然の意義とその保護

・鹿島町会場

講座名 現代社会と私達の生活

月 日 講 義 題 目 講 師

八・一八 レジャー時代の背景と生き方

八・一九 婦人をめぐる現代の課題 金沢大学助教授 古野 有隣

八・二〇 先行き不安の老人福祉対策 教授 戸 頃 重 基

・鳥屋町会場

講座名 農村の現状と将来

月 日 講 義 題 目 講 師

七・二五 最近の農村問題

七・二七 これからの農村はどう変えていったらよいか 金沢大学教授 二 宮 哲 雄

七・三〇 人類の繁栄のための自然の意義と保護 教授 矢 々 崎 孝 雄

八・九 農村の生活と健康法 助教授 木 村 久 吉

八・一二 暮らしの中の情報 古 野 有 隣

・中島町会場

講座名 国際理解と農村の生活について考える

月 日 講 義 題 目 講 師

八・二四(夜) 人類はいつまで地球に住めるか

八・二七(昼) 都市化と農村問題 金沢大学助教授 木 村 久 吉

八・二七(夜) 北陸新幹線と石川県の将来 教授 二 宮 哲 雄

八・三一(夜) アメリカはなぜベトナムで勝てないか 矢 々 崎 孝 雄

・能登島町会場

講座名 国際理解講座

月 日 講 義 題 目 講 師

七月一六日 一三・〇〇〇〜一五・〇〇 野崎・光顕寺 親鸞の思想 金沢大学助教授 出雲路 暢 良

七月一六日 二〇・〇〇〇〜二二・〇〇 向田公民館 婦人をめぐる現代の課題 金沢大学助教授 出雲路 暢 良

八月一〇日 二〇・〇〇〇〜二二・〇〇 向田公民館 最近の政治の動向 金沢大学助教授 岩 男 耕 三

・七尾市会場

講座名 国際理解講座

月 日 講 義 題 目 講 師

八・一一 週休二日制とレジャーアメリカの実情を見て

月 日 講 義 題 目 講 師

八・一一 週休二日制とレジャーアメリカの実情を見て

八・二五 金沢大学教授 矢ヶ崎 孝雄
アメリカの人間と社会

八・一八 アメリカはなぜベトナムに勝てないか 二宮 哲雄
戸 頃 重 基

・穴水町会場
講座名 地域問題講座

月 日 講 義 題 目 講 師

八・二二 最近の農村問題

金沢大学教授 二宮 哲雄

八・二三 これからの農村はどう変えていったらよいか

八・二八 北陸新幹線と石川県の将来

矢ヶ崎 孝雄

八・二九 レジャー時代の国土利用

〃

・門前町会場

講座名 宗教問題講座

月 日 講 義 題 目 講 師

八・三(午前) 釈尊の立場

金沢大学助教授 出雲路 暢 良

八・三(午後) 歎異鈔の世界

〃 〃 〃

八・四(午前) 親鸞の教育思想

・珠洲市会場

講座名 変貌する社会と経済を考える

月 日 講 義 題 目 講 師

七・二四 変貌する社会と情報

金沢大学助教授 古 野 有 隣

七・二五 消費者は王様か

〃 〃 〃

七・二八 日本の公害問題の特質

〃 教 授 戸 頃 重 基

・夏期開放講座受講人員

会 場 名	講座数	男	女	計
山 中	5	194	61	255
加 賀	4	126	97	223
美 川	3	237	282	519
松 米	3	69	32	101
津 任	3	110	530	640
宇 崎	3	75	25	100
高 氣	5	208	15	223
羽 松	3	38	85	123
富 昨	3	6	123	129
鹿 来	3	85	59	144
島 屋	3	98	52	150
鳥 島	5	60	85	145
中 尾	4	154	18	172
能 七	3	24	109	133
穴 門	3	75	34	109
登 珠	3	63	8	71
	3	83	45	128
	3	14	34	48
18会場計	63	1,719	1,694	3,413

(2) 文部省委嘱大学開放講座

テーマ 現代日本の課題

期 日 四十七年九月十八日～十月二十三日

講義題目と担当者は次の如くである。

九・一八 現代日本の課題

二二 現代の狂気

二五 自然と人間

二八 現代の都市と農村

一〇・二 戦後日本の地方自治

五 婦人をめぐる現代の課題

九 旧左翼と新左翼とのあいだ

一二 靖国神社問題の根

一六 北陸の風土と宗教

一九 昭和50年代の日本と北陸

二三 変動するアジアと国際政治の動向

新谷 賢太郎

多田 治夫

木村 久吉

二宮 哲雄

岩男 耕三

古野 有隣

戸頃 重基

出雲路 暢良

橋本 芳契

矢ヶ崎 孝雄

前田 慶穂

(八) 社会教育調査

本年度は五月二十二日の研究会にて、婦人の学習要求と学習行動に関する調査とし、金沢市内の団地主婦及び地方講座参加婦人を対象とする試案が報告された。

担当は古野、矢ヶ崎、二宮研究員。出雲路主事が必要に応じ参加。

更に具体的に方針が定つたのは十一月十三日の第四回調査委員会にてである。そこでの報告は、次の通りである。

(「季報」三十九号)

。十一月十三日 五・〇〇～八・〇〇PM

。出席者 矢ヶ崎、出雲路、古野

一 調査の目的、議題

生活課題としてはいかなるものが存在し、又意識しているか、そういう中から何を求めているか、そしてそれを実現していくための条件は何か、をさぐることを目的とする。そして変貌する地域の問題とのかかわりにおいて、地域の特性ととの関連の中でそれを明らかにする。

二 調査の対象

金沢市内三地点(○移住者人口が多く、地附き層が少数の地域、◎その逆の地域、◎両者がほぼ同数の地域)に在住する成人女子、サンプル数は各地点約二〇〇。

三 調査内容の構成と項目

I 生活実態

。生活時間

。生活行動圏

。余暇別用の状況、など

II 生活関心・学習要求

。関心領域

- 。学習希望内容
- 。希望条件

。要求の強度など

Ⅲ 地域とのつながり（意識・実態）

。居住年数

。来住先

。定住意志

。近隣社会への参加状況、など

Ⅳ 学習活動の実態

。学習機会への参加状況

。利用媒体の実状

。社教施設の利用状況、など

Ⅴ 関連資料の収集

四 今後のスケジュール

調査の実施は来年一月又は三月を予定する。年内の委員会において、調査票の作成と、対象地点の選定をする予定である。

以上の調査内容案にもとづき、二月十日に、対象地域の公民館関係者との協議を実施し、調査内容を決定した。そのさい、調査の実施期日を二月十七日～二十五日とすることとし、予定どおり実施した。記入済みの調査票は二十六日に回収し、現在集計作業が進行中である。

(九) 刊 行

・「社会教育研究」第十二号 B5版

二一八頁 昭和四十七年五月二十日発行

特集号 公害と教育

巻頭言

倫理学から日本の公害問題を考える

―特に資本制のゆがみと公共心の不在について―

戸 頃 重 基

公害罪処罰法と刑事政策

村 崎 精 一

日本資本主義と公害 ―足尾鉍毒事件を中心に―

橋 本 哲 哉

北陸における産業構造の変貌と公害

―研究序説(1)―

小 林 昭

失われゆく石川県の自然

木 村 久 吉

「金沢火力」建設反対運動の経過

岩 男 耕 三

公教育における公害教育の実態と展望

歴史教育協議会金沢支部

金沢大学と社会教育

―金沢大学における大学開放活動の回顧と展望(1)―

新 谷 賢 太 郎

研究室のあゆみ(その十一)

編集後記

・季報三十七、八、九、四十号（A5版）

三十七号（三十四頁）七月十日発行

入室式 室長あいさつ

入室式 協力会代表あいさつ

記念講演「親鸞の教育思想」

公害の現実と背景

北アメリカにおける日本

新任の弁

研究生のページ

生命と生命の尊重

昭和四十七年度社会教育研究室的歩み（その一）

昭和四十六年度社会教育研究室的歩み（補遺）

三十八号（六十六頁）十月十六日発行

「儒門の空」と「仏問の空」

誌上討論

提案

意見一

二

三

四

研究生のページ

戸 頃 重 基

大 平 勝 馬

松 尾 宝 作

出 雲 路 暢 良

岩 男 耕 三

矢 ヶ 崎 孝 雄

古 野 有 隣

後 藤 為 次

（その一）

（補遺）

新 谷 賢 太 郎

松 尾 宝 作

戸 頃 重 基

新 谷 賢 太 郎

岩 男 耕 三

橋 本 芳 契

公害問題の焦点とその背景

昭和四十七年度夏期開放講座日程

社会教育研究室的歩み（昭和四十七年度第二報）

（一九七二・七・九）

三十九号（四十二頁）昭和四十八年一月十六日発行

人間と自然 人類は亡びるか

アメリカで見たこと、思ったこと

社会教育指導者の研修と地域の社会教育

——一つの提言——

「人間学」に対する誌上討論の意義について

第一回共同研究会記録

第二回共同研究会記録

社会教育研究室的歩み（昭和四十七年度第三報）

（一九七二・一〇・一一）

四十号（三十四頁）三月三十日発行

誌上討論に答えて

第三回共同研究会記録

第四回共同研究会記録

第五回共同研究会記録

社会教育研究室的歩み（四十七年度第四報）

（一九七二・一二・一九七三・二）

佐々木 勝 康

木 村 久 吉

多 田 治 夫

出 雲 路 暢 良

松 尾 宝 作

松 尾 宝 作

松 尾 宝 作

松 尾 宝 作

松 尾 宝 作

松 尾 宝 作

松 尾 宝 作

松 尾 宝 作

松 尾 宝 作

松 尾 宝 作

松 尾 宝 作

松 尾 宝 作

松 尾 宝 作

松 尾 宝 作

松 尾 宝 作